

6月のおはなし

「地球最後の日」

そ

の年の梅雨は、栓が壊れた水道のようにとめどなく雨が降り続いていた。そんな空模様をながめていた床屋は、窓の外を見るのをやめて、テレビに向き直った。

テレビはここ数日間、現下の差し迫った状況を繰り返し伝えていた。だが、床屋が現下、気になっていたのは、この理髪店の天井近くに据え付けたテレビの右斜め上で蛍光灯が切れかけてまたたいている事だった。

床屋は客を待つのを諦め、電気屋に行くことにした。もつと

1

もこの数日、客はひとりも来ていなかった。床屋はガラス扉にかかっている「営業中」のふだを反して「準備中」にすると、少し離れた商店街に向かった。

途中に公園があった。滑り台

2

のゾウや砂場を守るライオンも雨に打たれていた。床屋にとって意外だったのは、緑色の雨合羽をきた少女が一人で遊んでいたことだった。少女は公園を右へ左へ駆け回っていた。床屋はしばらくそれを眺めていたが、

やがてまた歩き出した。

商

店街は一直線に延びるアーケードで、遥かに遠いその果てまで灰色のシャッターが続いていた。人影はなく、風だけが通り抜けていた。皆どこかに行ってしまったのだ。

竹田電気店もシャッターがおりていた。床屋は、しばらくその前に立ち尽した。この電気屋とは随分懇意にしたが、今彼はどうしているだろうか、床屋はそんなことを考えていた。しばらくすると、再び歩き出した。



足をのばしてもうひとつの電気

屋に向かうつもりだった。

う

つ向きがちに歩いている
と、床屋は突然声をか
けられた。床屋は驚いて立ち止
まった。幻聴ではなく、声をか
けたのは煎餅屋だった。左右見

渡す限りシャッターが続くこの
中で、彼の店だけがいつもと変
わらず開いていた。主がにこに
こ笑いながら手招きする様は、
一筋の光明のようであり、覚め
ない悪夢のようでもあった。
「やつてるの？」
「ああ、こないだの続きやって
きなよ」

店の隅には指しかけの将棋盤
があり、二週間前に二人が指し
たままになっていた。二人は長
椅子に腰かけて将棋を指し始め
た。

何手か指したところで煎餅屋
が長考となった。気が付くと時
刻は夕方になっていた。床屋が
腰をあげた。

「そろそろ帰るわ」

「ああ、じゃこのままにしとく
よ」

煎餅屋は盤面を見たまま、ま
だ考えていた。

公

園を通るとあの少女がま
だ遊んでいた。床屋がし
ばらく眺めていると、少女が床
屋に気が付いて足を止めた。二
人は一〇メートル程の距離をお

いて向かい合った。

「雨なのに元気だね」

床屋が声をかけた。

「わたしカップだもん。平気よ」

確にその子の雨合羽はカップ
だった。ひさしが黄色いクチバ
シで頭の上には皿が描かれてい



た。
「カッパは雨が好きなの。だから雨の日に遊ぶのよ」

少

女はそれだけ言うともた駆けていった。見送る床屋の顔から、これまでの憂色が少し晴れていった。

床屋が家に着くと、もう閉店の時間だった。店の電気を消そうとして蛍光灯を買い忘れたことに気付いた。■

5



妄想の地平線

6月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU